日本医史学雑誌　第56巻第3号（2010）441–448

2. 大塚恭男先生の人と仕事

小曽戸　洋

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部部長

はじめに

平成21年（2009）3月8日朝，大塚恭男先生は御逝去された．満79歳であった．当日の日曜日は日本東洋医学会の関東甲信越部会が平河町で開催中で，奥様より御連絡を受けて昼に大塚邸に馳せ参じた親族以外の関係者は，石野尚吾・丁宗鐵・花輪壽彦先生と私の4人だった．すでに病院より戻られていた御遺体に手を合わせ，奥様と渡辺賢治先生より御逝去の経緯を伺った．

通夜は11日午後6時~7時，告別式は12日午前11時~12時，四谷たちばな会館において多数の参列者のもと粛々と行われた．12日午後の代々幡斎場における火葬，遺骨納壺から同日（初七日）の会食は御遺族のみで行われたが，私は大塚家の奉公人に準じてか，遺族外で唯一人列席させていただけたことは，弟子としてこのうえない幸であった．奥様の思し召しは，いつ想い出しても目頭が熱くなる．

公的には「大塚恭男先生顕彰会」が2ヶ月後の平成21年5月9日，品川のホテルパシフィック東京にて午後5時より開催された．発起人代表は，寺澤捷年東亜医学協会理事長・酒井シヅ日本医史学会理事長・花輪壽彦北里大学東洋医学総合研究所所長・石野尚吾日本東洋医学会会長．発起人は66名．約100名の参加者があった[1]．このとき岡田靖雄先生から，一周忌の追悼会は日本医史学会の主催で行いたい，という御提案があった．

大塚家親族の一周忌は平成22年3月6日（土），新宿・ハイアット・リージェンシー東京の翡翠宮において行われ，親族以外の門人数名も参加し，恭男先生の生前を偲んだ．

そして3月27日（土），昨年来の岡田先生の提唱を受けて，恒例の日本医史学会例会を「大塚恭男先生をしのぶ会」とし，順天堂大学10号館2階において開催したのである[2]．当日は大塚恭男先生の泰子夫人ほか御親族も参会．泰子夫人からはご挨拶をいただくとともに，日本医史学会に多額の御寄付を賜った．ここに記して謝意を表する．終了後は酒井シヅ先生の計らいで順天堂の山の上ホテルレストランにおいて御遺族を交えた関係者による懇親会がもたれた．

本稿は当日の「しのぶ会」における筆者の講演内容を整理し，加筆して纏めたものである．

1. 私と大塚恭男先生

私が大塚恭男先生に初めてお目にかかったのは昭和53年のことであった．当時先生は(社)北里研究所附属東洋医学総合研究所の臨床研究部長の職位にあり，私は厚生省の高官・本山氏の紹介状をもって，東医研の臨床研究部長室をお訪ねした．私は当時，近畿大学東洋医学研究所（有地教授・久保助教授）に勤務しており，東京での再就職を希望していたので，岳父の薦めで，岳父と恭男先生の共通の友人であった本山氏を介して北里東医研を目指したのである．私は昭和50年に，恭男先生の御尊父・敬節先生をお宅に二度にわたりお訪ねしたことがあり，敬節先生とは面識も文通もあった．

当日，私は恭男先生に，中国医学古典や伝統医薬学の歴史を研究したいと希望を述べた．先生は，自分ももとよりその分野には興味があると言われ，御自分で書かれた「甘草の歴史」という論文の別刷を下さった．しかし，私の就職に関しては，東医研はいまだそこまでの余裕はない，研究者として身を立てるには学位を取得するのが先決

だろうとの助言を述べられた．私は帰路「甘草の歴史」を読んで恭男先生の学問の深さを痛感した．

私が念願の北里東医研の就職を果たしたのはこの4年後，昭和57年4月のことである．その間，昭和55年10月に東医研初代所長の大塚敬節先生が亡くなられ，矢数道明先生が2代所長に就任された．私はすでに昭和50年から矢数道明先生の門人であった．敬節先生も道明先生も恭男先生もみな医学史には造詣が深かった．新所長に就任された道明先生は，医史学の研究部門を作ることを企てられ，恭男先生と協議を重ね，実行に移されたのである．

私は恭男先生の助言に従い，昭和54年に近大東医研を辞し，昭和56年には鹿児島大学医学部生理学教室から日本大学医学部生化学教室に籍を移して医学博士取得の研究に入っていた．また同じ昭和56年10月には，中国医学古典の基本典籍たる『黄帝内経太素』『諸病源候論』『脈経』『外台秘要方』などを収録した『東洋医学善本叢書』を編刊して世に問うたところであった．道明先生は私の業績を高く評価して下さり，恭男先生もまた当時日本医史学会で発表していた私の研究を認めて下さり，昭和57年4月，晴れて私を北里東医研の医史学研究員として迎えて下さったのである．

恭男先生は私が北里東医研に入所するとき，身元保証人を買って出て下さった．書類の本人との関係欄に「友人」と記入されたので，「上司と書いて下さい」と申し上げたら，「君とは友人だ」とおっしゃった．感激に耐えなかった．先生はそういうお人柄であった．こうして生涯の恩人，恩師となり，畏敬かつ親愛する人となった．

私は酒は強いほうではないが，嫌いというわけではないので，よく先生のお伴をさせていただいた．ことに医史学関係の先生には酒を好まれる先輩が多かった．他界された宗田一先生，三輪卓爾先生，矢部一郎先生などしかりである．

銀座にはシルクロードという小さな店があった．本郷の東大赤門前の小道を入った右手には鳥八という焼鳥屋があり，先生は学生時代から通っていたという．最後にお伴したときは，もと若く綺麗だったというおかみさんには孫がいた．昨年一人で訪ねたら店は跡形もなく更地になっていた．

順天堂での医史学会会合の帰りはお茶の水駅聖橋出口近くの2階の飲屋へ皆でよく行った．今は沖縄料理の店になっている．

先生の最後の仕上げはたいてい四谷三丁目荒木町のイニシャルYという店だった．ママの名はY. F. 今もある．あるいは近くの伽羅という小料理屋にもよく行った．

北里研究所では昼間，診療のないとき，しばしば麻布十番まで歩き，赤い靴のきみちゃん像に小銭を奉げた．「赤い靴」の歌も唄った．帰りは有栖川公園に立寄るのが決まりだった．よく歩いたものである．先生は私よりも健脚だった．診療中の昼食はやむなく店屋物のざるそばで済まされることが多かったが，外食では近くの大久保だんごという店がご贔屓だった．先生は甘辛両党．副所長室（のち所長室）で飲むときは，肴は煎餅があれば上等．下手をすれば大棗か，あるいはエビオス，ビオフェルミンを囓りつつ学問談義が続くのであった．

そういうことが何より楽しい毎日だった．この手のエピソード，もっと書きたいことが山とあるが，これ以上は自制すべきだろう．ただ，先生はどんなに飲まれても品位だけはいささかも落とされることはなかった．

私が最後に恭男先生の尊顔を拝したのは平成19年2月28日であった．北里研究所の意向を受けて，先生のご自宅にドイツ・マールブルグ大学の銅版画[3)]の返却を求めて伺ったのである．先生はもはやこの品に何の未練も示されなかったが，私は失礼を心の底から詫びた．これがこの世での最後となったことは今もって悔いても悔い切れない．

初対面から最後の拝眉まで29年間．ことに，私の入所昭和57年から，恭男先生が北里東医研の外来診療を平成13年3月に終了されるまでの19年間，親兄弟よりはるかに密接な御交誼を得，御奉公できたことは，私の人生で最大の幸福であった．

昭和59年4月21日，名古屋における
第85回日本医史学会にて
（後列，向かって左から真柳誠・花輪壽彦・石原武・大塚恭男・矢数道明・平馬直樹・安達原曄子，前列，丸山敏秋・小曽戸洋・安井広迪）

平成6年4月27日，青梅の玉堂美術館前にて
（左は慶応義塾大学医学図書館の窪田よし女史．小曽戸が大塚先生と旅行したのはこれが最後となった）

2. 大塚家略史[4)]

大塚恭男先生は医系の5代で，初代は希斎という．代々，堂号を修琴堂と称した．希斎は土佐高知の人で，山内侯の家臣．産婦人科を業とした．その先祖は北村姓で，山内一豊に従って高知に移ったと伝えられる．「修琴」とは人体を琴になぞらえ，健康体を作るということから．希斎にはなかなか子供ができなかったので，兄の子を養子とした．2代目恭斎である．

恭斎も産婦人科を継いだ．恭斎はかの華岡青洲が開いた家塾「春林軒」に入って医を学んだ．華岡塾の門人帳に「安政四年三月十五日土佐領石邑大塚恭斎」とあるのがその人である．恭男先生の名はこの2代目恭斎に因む．

恭斎が養子に入ってまもなく，希斎には男子ができた．仰軒という．仰軒は明治の初期に東京大学医学部に入ったが，石炭王に憧れて中退した．仰軒はドイツ語が話せたことから，地質調査でたまたま高知を訪れたナウマンと親交を結んだ．「ナウマン象」で有名なお雇い外人，ドイツのエドモンド・ナウマンである．再度高知の土を踏んだナウマンは大塚家に招かれ，興のむくまま毛筆を執り，漢文で「学は見聞を専らにし，命は経験を増す」と揮毫した．その扁額は現在も大塚家に伝わる．修琴堂3代目は恵迪といい，済生学舎に学び西洋医学を納めた．

大塚修琴堂の名を日本中に知らしめたのは，4代目の敬節である．明治33年の生まれ．大正12年に熊本医学専門学校を卒業した．

敬節は医専で西洋医学を学ぶうちに，西洋医学に対し，疑問を抱くようになった．それは，内科の教授の治療ではいっこうに好転しなかった不眠症と盗汗(ねあせ)の持病が，民間健康法で一晩にして治癒したのがきっかけだった．

医専を卒業した敬節は，漢方医学を学ぶ決意を固め，当時の数少ない漢方医書をむさぼり読んだ．最も感銘を受けたのが，当時刊行されたばかりの湯本求真著『皇漢医学』である．

『皇漢医学』の独習によって試みた漢方薬は，驚くほどの効果があった．手さぐりで用いてもこれほどだ．師に就いて学べばどんなに効くことか．こう思ったら矢も盾もたまらない．敬節は妻と生後まもない長男恭男先生を高知に残し，単身東京へ出て，湯本求真の門に入った．周囲の人はみな反対した．時に昭和5年，31歳であった．

翌昭和6年，敬節は郷里から妻子を連れ，東京・牛込船河原町に開業した．当時漢方といえば零落のどん底だった．患者の一人も来ない毎日が続いた．しかし向学心はつのる一方だった．

そのころ，敬節は詩友の伊福部隆彦を介して，権藤成卿の知遇を得た．権藤は農本主義者で，そ

の主張するところは自然漸化の東洋思想に根ざしたものであった．敬節は大いに感じ，その思想を漢方に生かすべくつとめた．

敬節は湯本求真に就いて，『傷寒論』を信奉する古方派の漢方を修めた．当時の漢方界では後世派や折衷派をもって任ずる別派もあった．これに対し，権藤は「古方派には排他癖がある．反対学を学べ」と説いた．権藤の助言は敬節の考えを一転させた．「ただでさえ少ない漢方家同士が角つき合わせていたのでは，自分で自分の首を絞めるようなもの．大同団結だ」．こうして敬節は，日本漢方界の団結と復興への道を邁進することとなる．

敬節は昭和55年に80歳の生涯を閉じるまで，そのすべてを漢方に捧げた．昭和9年，日本漢方医学会の創立．昭和11年，偕行学苑の結成．東亜医学協会の発足．昭和18年，同愛記念病院東方治療研究所設立．戦後昭和25年，日本東洋医学会発足．さらに金匱会中将湯ビル診療所，日本漢方医学研究所の創設．これら戦前戦後の漢方の研究・教育・診療機関の設立に，つねに主導者として活躍．昭和漢方の第一人者としての名声を不朽のものとしたのである．大塚修琴堂は西荻窪を経て，昭和30年四谷三栄町に移転．常に門前市をなすほどの患者の評判を得た．

昭和48年には，武見太郎日本医師会会長と計り，港区白金の北里研究所敷地内に，北里研究所附属東洋医学総合研究所を創設し，初代所長に就任した．同研究所は日本で最初の公認東洋医学総合研究機関で，ようやく漢方は現代医療のなかでの地位を確保した．昭和53年には漢方界で初の日本医師会最高優功賞の受賞者となった．

3. 大塚恭男先生略歴

大塚恭男先生は昭和5年1月29日，大塚敬節の長男として高知県香美郡日章村田村に生を受けた．母堂は福栄．翌昭和六年に上京して牛込区船河原町に居住した（敬節は前年に上京．その間の経緯は大塚恭男「東洋医学とわたし」[5] を参照）．

東京府立津久戸国民学校，東京府立第一中学校，旧制武蔵高等学校，旧制第一高等学校（新制東京大学教養部・武蔵大学）を経て，昭和26年，東京大学医学部医学科に入学．昭和30年，同大学卒業．翌年，東京大学附属病院第一内科勤務（日立製作所病院に派遣）．昭和33年，東京大学大学院医学博士課程（薬理学）に入学して昭和37年に同過程終了．医学博士．この間，昭和35年に泰子夫人と御結婚．二女を儲けられた．昭和37年～41年，旧西ドイツ・オーストリアに留学（カール・トーメ社薬理研究所，ウィーン大学医学部薬理学教室）．帰国後，東京大学薬理学教室勤務，また横浜市立大学（薬理学）講師を経て，昭和47年に（社）北里研究所東洋医学総合研究所に入所（非常勤）．昭和51年から常勤となり，北里研究所部長．その後，東医研臨床研究部部長，北里研究所社員，北里大学客員教授，東医研基礎研究部長などを歴任し，昭和57年に東医研副所長に就任．昭和59年には北里研究所理事．昭和61年には東医研所長に就任した．平成5年には北里研究所の副所長となる．

学会関係ではとくに（社）日本東洋医学会と日本医史学会の運営に尽力され，両学会の理事，常任理事などを長年勤められた．昭和57年および平成元年には日本東洋医学会副会長，そして昭和62年には同学会会長に就任された．また同昭和62年には日本医史学会総会会長も任じられた．

平成8年，北里東医研所長，北里研究所副所長を辞して，北里東医研名誉所長となられ，修琴堂

平成元年秋，閉鎖中の修琴堂大塚医院診療室の前にて
（修琴堂の扁額は書家・川村驥山の揮毫）

大塚医院を再開業．以後，東医研の外来診療は週一回担当されたが，これも平成13年3月をもって終了された．

恭男先生は文学者でもあり，幼いころから和歌や漢詩に親しみ，広く和漢洋の古典に通じた．百人一首の選手もやった．アララギ派にはとりわけ傾倒した．話題が斎藤茂吉や中村憲吉に及ぶと，とどまるところを知らなかった．その作品はことごとく読んで暗記したというから，恐れ入る．

医学部1年生のとき「朝日歌壇」に投稿した．年が明けた昭和27年3月30日の朝日新聞に，斎藤茂吉選として「燈を消して寒くなりたる午後五時の解剖室に手を洗ひをり」が載ったときの嬉しさは忘れないとよく語っておられた．同じ年には広島の布野に中村憲吉の生家を訪ねた．数年後に迎えた泰子夫人との新婚旅行でも再度布野を訪れたという熱の入れようであった．

また漢文にもめっぽう強かった．若いころには古典漢文の典範『文選』を原書で通読したこともあったという．少しアルコールが入ると，六朝・唐宋の漢詩が無尽蔵に出る．一方，フランス文学も原書で読んだ．ドイツ語も英語も達者である．酒席の余興にはインド訛りの英語も出る．こういうわけだから，恭男先生の文章の巧さは斯界では定評がある．その随筆は人の心をとらえて離さない．

中学1年のとき，恭男先生は『学友』という雑誌に，父敬節の学友A先生（荒木性次）のことを題材にし，「僕もA先生や父の志を継いで医師となり，今日では衰亡のどん底にある東洋医学の復興の為に懸命の努力を捧げたいと思っています」と将来の抱負を書いた[6]．そしてついにそれを生涯貫かれたのであった．

4. 主　　著

編著，共著書はすこぶる多く，枚挙に遑がない．主著に次のような出版物がある．

『東洋医学入門』（日本評論社，1983，並製B6判，350頁）．53歳のときの出版．かつて諸種の雑誌，書籍に載せられた文章に若干の手を加えて編集したもの．「東洋の医学」「漢方の治療」「本草ノート」「東洋医学の人びと」の各篇からなる．

『東西生薬考』（創元社，1993，上製A5判，310頁）．1969年から1977年にかけて（39～47歳）『活』という雑誌に「西洋の生薬治療」と題して連載した記事をまとめたもの（第1部は『ファルマシア』から）．東西の文献に通じた恭男先生ならではの名著．親友の有馬朗人先生（元東京大学学長・文部大臣）による名書評（読売新聞，1993.4.5）がある．

『漢方と薬のはなし』（思文閣出版，1994，並製B6判，276頁）．『日本工業新聞』（1984），『毎日新聞』（1989），『月刊クレーン』（1986～1989）その他に掲載された記事をまとめたもの．第1部は「私の漢方ことはじめ」「東洋医学のすすめ」「やさしい漢方」，第2部は「くすり徒然草」，第3部は「思い出の人びと」（武見太郎，中村憲吉，朝比奈泰彦，北里善次郎など）からなる．第2部では恭男先生の博学ぶりがうかがえる．

『医学史こぼれ話』（協和企画，臨床情報センター，1995，新書判，278頁）．『漢方医学』という月刊誌に1977年（47歳）から10年余り，270回にわたって連載したコラムを集めたもの．序文はかの森岡泰彦先生（東大医学部の同級生）が執筆．西洋編・東洋編・日本編の3部からなり，古今東西の医学史トピックスが軽妙なタッチで紹介されている．

『東洋医学』（岩波新書，1996，新書判，225頁）．恭男先生はずいぶん前からこの書の執筆依頼を受けておられ，私小曽戸に「こういうものは少しずつ書き溜めるものじゃない．一気呵成に書かないと勢いが出ないよ」と語り，長いこと筆を執られなかったが，いったん書き始めるとものの一週間くらいで脱稿されたようである．まえがきに「畏友小曽戸洋博士」とあるのは恭男先生ならではの優しい配慮である．

『東洋医学の世界』（北里研究所東洋医学総合研究所，1998，上製A5判，830頁）．恭男先生が北里東医研の所長を退任されるにあたり企画された先生のかつての論文の集成．その学問の広さと深さを示して余りある．私に謝辞が述べられているが，実は最も尽力したのは先生の娘婿の渡辺賢治

先生である．非売品であるが，残部が若干あるので，本学会会員には頒布の便宜をお計りしたいと思う．

5. 大塚恭男先生年譜[7)]

昭和5年（1930）
　1月29日　高知県香美郡日章村田村に出生
昭和6年（1931）
　5月　上京（牛込区船河原町6）
昭和17年（1942）
　3月　東京府立津久戸国民学校卒業
　4月　東京府立第一中学校入学
昭和22年（1947）
　3月　東京府立第一中学校卒業
　4月　旧制武蔵高等学校入学
昭和23年（1948）
　3月　旧制武蔵高等学校一年終了時中退
　4月　旧制第一高等学校入学
昭和24年（1949）
　3月　旧制第一高等学校一年修了（学制改革による）
　4月　新制東京大学教養部編入，武蔵大学入学
昭和26年（1951）
　4月　東京大学医学部医学科入学
昭和30年（1955）
　3月　東京大学医学部医学科卒業
昭和31年（1956）
　3月　医学実地修練（インターン）修了
　4月　東京大学付属病院第一内科（田坂内科）勤務（~33年3月）
　10月　日立製作所病院へ派遣
昭和33年（1958）
　4月　東京大学大学院医学博士課程（薬理学）入学
昭和35年（1960）
　11月23日　泰子夫人と結婚
昭和37年（1962）
　3月　東京大学大学院医学博士課程（薬理学）卒業，医学博士号取得
　9月　旧西ドイツ・オーストリア両国留学（~41年3月）
　カール・トーメ社薬理研究所入所（~40年8月）
昭和40年（1965）
　9月　ウィーン大学医学部薬理学教室入室（~41年3月）
昭和41年（1966）
　4月　東京大学医学部薬理学教室勤務（~42年2月）
昭和42年（1967）
　4月　修琴堂大塚医院副院長（~51年3月）
　横浜市立大学非常勤講師（薬理学）（~51年3月）
昭和43年（1968）
　4月　日本東洋医学会理事（~45年4月）
昭和47年（1972）
　4月　北里研究所東洋医学総合研究所入所（非常勤）
〈著書〉『医学史の旅《パリ》』E・ザイドラー著／訳著（医歯薬出版）
昭和48年（1973）
　3月　独協医科大学非常勤講師（医史学）
　4月　日本漢方医学研究所理事
〈著書〉『東洋医学をさぐる』編著（日本評論社）
昭和49年（1974）
　4月　北里研究所附属東洋医学総合研究所客員部長（~51年3月）
昭和51年（1976）
　4月　北里研究所部長（~55年3月）
　北里研究所東洋医学総合研究所基礎研究部長（~52年6月）
　昭和大学薬学部兼任講師（和漢生薬学）（~平成7年3月）
　信州大学医学部講師（~52年3月）
　5月　北里研究所東洋医学総合研究所研究部長
　10月　日本医史学会常任理事
　谷口財団主催「東西比較医学史シンポジウム」年1回開催開始，運営委員
〈著書〉“Asian Medical Systems: A Comparative Study”共著（カリフォルニア大学出版局）

昭和52年（1977）
7月 北里研究所東洋医学総合研究所臨床研究部長（～59年3月）
昭和53年（1978）
6月 厚生省中央薬事審議会臨時委員・一般用医薬品再評価調査会委員（～平成5年10月）
4月 財団野間科学医学研究資料館運営委員（～15年3月）
昭和54年（1979）
5月 厚生省特定疾患スモン調査研究班発足，班員（～昭和56年度）
〈著書〉『知の革命史　第6巻　医学思想と人間』共著（朝倉書店）
昭和55年（1980）
4月 北里研究所社員
9月 厚生省中央薬事審議会臨時委員・漢方生薬製剤調査会委員（～平成5年10月）
昭和56年（1981）
4月 北里大学客員教授
10月 北里研究所附属東洋医学総合研究所基礎研究部長（兼務）（～57年9月）
野間医学科学研究資料館常務理事
昭和57年（1982）
4月 北里研究所東洋医学総合研究所副所長（～61年7月）
日本東洋医学会副会長（～59年4月）
6月 北里学園評議員（～平成3年6月）
〈著書〉『和漢薬物学』共著（南山堂）
昭和58年（1983）
4月 北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究室室長（兼務）（～60年9月）
〈著書〉『東洋医学入門』（日本評論社）
昭和59年（1984）
5月 北里研究所理事（～平成8年6月）
10月 富山医科薬科大学大学院薬学研究科講師（～60年7月）
11月 日本学術会議医学教育・医史学研究連絡委員会委員（60年7月）
〈著書〉『漢方の基礎と応用』共著（薬事新報社）
昭和60年（1985）
1月 医道顕彰会副会長
9月 日中医学協会評議員
10月 富山医科薬科大学医学部講師（～平成5年3月）
〈著書〉『今日のアジア伝統医学』共編著（Excerpta Medica）
『感染症の漢方治療』編著（メディカルトリビューン）
『臨床医学と薬用植物―世界の薬草と漢方』共訳著（エンタプライズ）
『現代の漢方治療概説・症例・文献リスト』共著（東洋学術出版社）
昭和61年（1986）
4月 北里研究所東洋医学総合研究所診療部門長（兼務）（～61年12月）
同所漢方診療部長（兼務）（～平成元年3月）
8月 北里研究所東洋医学総合研究所所長（～平成8年6月）
〈著書〉『繁用漢方薬』共著（日本臨床）
『プライマリ・ケアと東洋医学』共編著（誠信書房）
昭和62年（1987）
4月 日本医史学会総会で会頭講演「隋唐の医書にみる精神病とその治療」
5月 日本東洋医学会会長（～平成元年5月）
〈著書〉『老いの発見3 老いの思想』共著（岩波書店）
『臨床薬物治療学大系20 和漢医薬学』共編著（情報開発研究所）
昭和63年（1988）
4月 筑波大学講師（～平成元年3月）
9月 日本学術会議精神医学研究連絡委員会委員（～平成3年8月）
〈著書〉『東洋医学大事典』共編著（講談社）
平成元年（1989）
5月 日本東洋医学会副会長（～3年5月）
7月 チェコ科学アカデミープルキンエー賞受賞
10月 東京生薬協会表彰
〈著書〉『最新の漢方薬理』共編著（Excerpta Medica）

　　『日本科学史の射程』共著（培風館）
平成2年（1990）
　4月　東亜医学協会理事長（～15年）
　5月　厚生省長寿科学総合研究事業東洋医学分野分野長（～5年5月）
〈著書〉『東洋医学入門』共著（読売新聞社）
平成3年（1991）
　4月　東京都衛生局東洋医学検討委員会委員
　9月　日本学術会議医薬研究連絡委員会委員（～6年8月）
〈著書〉『新・漢方処方マニュアル』共編著（思文閣出版）
平成4年（1992）
　8月　第9回和漢医薬学会大会会長
〈著書〉『内科診療と漢方』共編著（医薬ジャーナル社）
　　『中国本草図録』共監修（中央公論社）
平成5年（1993）
　5月　厚生省長寿科学総合研究事業研究企画委員会委員（～8年5月）
　6月　北里研究所副所長（兼任）（～8年6月）
〈著書〉『東西生薬考』（創元社）
　　『これだけは知っておきたい漢方治療』編著（日本放送出版協会）
平成6年（1994）
　4月　和漢医薬学会理事（～10年3月）
　8月　第4回国際アジア伝統医学大会会頭講演「古代アジア医学の伝統」
〈著書〉『漢方と薬のはなし』（思文閣出版）
　　『近代中国の伝統医学』共訳著（創元社）
　　『健康生活医学事典』共訳著（創元社）
平成7年（1995）
　4月　新潟大学医学部講師（～8年3月）
　6月　日本東洋医学会理事（～10年5月）
〈著書〉『医学史こぼれ話』（臨床情報センター）
　　『漢方医学の新知識』共著・共監修（日本評論社）
平成8年（1996）
　6月　北里研究所東洋医学総合研究所名誉所長
　7月　修琴堂大塚医院開業
〈著書〉『新書 東洋医学』（岩波書店）
平成10年（1998）
〈著書〉『東洋医学の世界』（北里研究所東洋医学総合研究所）
平成11年（1999）
　5月　日本東洋医学会名誉会員
平成15年（2003）
　2月　東亜医学協会会長
平成19年（2007）
　4月　東亜医学協会名誉会長
平成21年（2009）
　3月8日　永眠　享年79

文献および注

1)『漢方の臨床』56巻6号（2009），1077～1082頁.
2)『大塚恭男先生顕彰記念文集』（大塚恭男先生顕彰会，2010.3）は，前述の大塚恭男先生顕彰会におけるスピーチ，その他の追悼文，さらに恭男先生生前の旧文を収録し，この日を期して刊行し，当日参加者に配布された.
3) これはかつてベーリング（第1回ノーベル賞受賞者）から北島多一（北里研究所第2代所長）へ，そして北里善次郎から恭男先生に贈られたもの．下述の恭男先生の著書『漢方と薬のはなし』の231頁参照.
4)『私の履歴書・文化人19』（日本経済新聞社，1984），393～471頁（大塚敬節）に詳しい．本項の記載は，「修琴堂大塚家の系譜」（『みどり』4巻4号，1989.10）によった．同記事は恭男先生の校閲のもと筆者が執筆したものである.
5) 大塚恭男『東洋医学』（岩波新書，1996）のあとがき.
6) 前掲注2）の147～148頁に再録してある.
7) 本年譜は前掲文献2）収録の大塚恭男先生略歴に若干加筆したものである.